

書籍紹介



『野生動物の看護学』

Les Stocker 著

中垣和英 訳

文永堂出版, 2008年刊, 369頁

村瀬真弓・伊藤友貴・浅川満彦 (酪農学園大学 獣医学部 感染・病理部門 / 野生動物医学センター WAMC)

序

私たちの施設 WAMC は救護を前面に出してはいない。しかし、傷病個体は当然ながら搬入される。このような個体の大部分は野生動物医学研究の貴重な材料となっているが、もちろん、臨床系教員等の協力を得、最大限のケアをしている。中には野生に戻された個体もあった (追跡調査をしていないので、あえて「復帰」という用語は使わない)。もちろん、そのような活動ではきちんとしたテキストは有用で、我が施設にもこれまで多くの投資をしてきた関連蔵書の数々がある。

そして、今回、またも新たなテキストが刊行された。正直、食傷気味であったが、著者が、なんと The Wildlife Hospital Trust (St. Tiggywinkles) の方が記されている。私の英国留学時、何度、Tiggywinkles という奇妙な響きのある単語を聞いたことか。と

ても公平な書籍紹介はできそうもない。そこで、本文の「序」は浅川が記したが、もっとも使うであろう学生さん2名の意見を中心に掲載した。なお、本書前半部については村瀬、後半部については伊藤の WAMC 新人がそれぞれ担当した。(文責 浅川)

前半部

まず、本書のタイトルが「野生動物の看護学」であるように、薬品や術法などが詳しく述べられていることから、ある程度の獣医学の専門知識や医療設備のある獣医師、獣医学生や野生動物救護の技術のある人がより知識を得るための本であることを確認されたい。本書の構成を簡単に示すと以下の通りである。

- 1 章－ 10 章 野生動物受け入れ時に知っておくべき知識の概要 (野生動物とは、各種病症ごとの対処法、輸液療法、創傷管理、骨折の応急処置と管理、野生鳥類の病気、野生哺乳類の病気)
- 11 章－ 19 章 各種鳥類の救護・看護方法
- 20 章 親からはぐれた雛の飼育法
- 21 章－ 29 章 各論哺乳類の救護・看護方法
- 30 章 親からはぐれた野生哺乳類の飼育法
- 31 章 爬虫類と両生類

哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類の基本的な処置、往々に見られる病症などが総論で取り上げられており、各論で各種それぞれにあった処置が書かれている。(ただし、爬虫類と両生類に関しては各論的な記載はない)。各論では各々の種の博物学からはじまり、その動物の生息場所、生態などを紹介しており、ほかにケアに関わる装置・輸送、救護・取扱い時の注意事項、種 (グループ) 特有の疾病や病因論、収容法、給餌法、リリース法、その動物が関わる可能性のある法令 (ただし英国における) が記されている。また、末尾には付録として英国における救護に関連するガイドラインやリハビリテーションに関わる業者の住所録が明記されており、英国の救護に対する自治体や国の背景を知ることができる。

第9章では「野生鳥類の病気」と題され、野生鳥類が陥りやすい疾病を真菌症、ウイルス症、細菌症、外部寄生虫、人為的要因による疾病 (釣り糸、頭部外傷、中毒、銃創)、各種栄養素の欠乏症と多岐にわたった記載とそれぞれが頻発する種を挙げている。さらに、第19章、海鳥の各論では現在日本でも問題となっている油汚染の救護法をフィールドにおける対処と施設内での対処とに分けて書かれていた。

救護の入門書として、特に学生に読んでもらいたい本であると

思う。訳本としては簡単な文章で説明されているので読みやすかったのがその理由である。私（村瀬）はもっと詳しく、これから救護を勉強するにあたって逐一読んで行きたいと思った。しかし、訳本とはいえ、学生が入門書として気軽に手に取るには9000円は少々お高いかも…？（文責 村瀬）。

後半部

野生動物保護の関心が高まる一方で、傷病野生動物の看護とリハビリテーションについて記述されている文献はそれほど多くは存在せず、獣医師もまた、野生動物の経験がほとんどないというのが実際である。本書は野生動物リハビリテーションの比類ない専門知識を要約したもので、野生動物看護の特殊な点を取り扱い、救護や応急手当、リハビリテーション、リリースを網羅している。ほとんど形式張らないスタイルで書かれており、一般の方でも読み易いものとなっている。本書は、まず、はじめに総論（野生動物診療の基本的原則、最初の対応、輸液療法、創傷管理、骨折の管理、病気）、次に各論（鳥類、哺乳類、爬虫類・両生類）、最後に付録という構成でそれぞれに写真やイラストが添付され、とても分かりやすいものとなっている。

本書で取り上げられている野生哺乳類は英国で遭遇する可能性のあるもので、小型哺乳類（ネズミ類、リス、ヤマネなど）、ハリネズミ、カイウサギ・ノウサギ、アカギツネ、イタチ科動物（アナグマ、イタチ、ミンク、オコジョなど）、シカ、コウモリ、モグラ、イノシシ、海棲哺乳類などである。このような哺乳類に遭遇する機会は、鳥類の場合と比較して極めて少ない。哺乳類の章で、私（伊藤）が興味を持ったのは第21章「小型哺乳類」、第27章「シカ」、第28章「コウモリ」、第29章「イノシシ」である。これらは今まで実際に見たことのある野生動物で、これからも目にする可能性の高い種であったからである。コウモリのようなとても小さな動物でも麻酔処置して治療行為を行うことに驚いた。骨折した場合の処置の1つとして行われる副木固定では、その副木は綿棒から作られていた。動物種によって全く異なる、体の大きさ、習性、生活環境などをふまえた上で、その動物に適した治療行為を行うということの難しさが少し分かった気がする。

第30章「親からはぐれた野生哺乳類を育てる」にも興味を持った。この章では、それぞれの体の大きさに合わせて給餌（授乳）に用いる道具の違いなども記されている。たとえばアナグマの子には子犬用の哺乳瓶、ハリネズミの子には1mlの注射器から作った授乳器が用いられる。驚いたのはヤマネやトガリネズミの子の授乳法で、絵筆を用いることだ。小型哺乳類では注射器からだ

けで給餌するものだと思っていた。絵筆は、体の大きさを実によく考慮したものだった。

本書で対象とされている動物種はとても限られたものであり、なおかつ本書は専門知識を要約したものであるため、専門性に求められる詳細な情報をすべて提供することはできないかもしれないが、野生動物の救護、看護の入門書としてはとても有用な本であると思う。（文責 伊藤）